

お浄土のしおり 善導寺寺報 季刊七号

秋号
平成二十七年
九月四日

◎浄土は 死んでからの問題ではなく 今の私に 真実の生き方を呼び覚まし 真実に生きる方向性を 示してくれる (仏教の法語)

◎愧(は)づかしくない生きかたなど 人間の生き方では ないと思う (浅田正作)

浅田正作 『あさだ・しょうさく』

念仏詩人、1919～)

詩集 『霞道を行く』 詩 大とせず』

◎信仰を特異の存在であるかのように思っている人たちは、信仰の門にさへ佇(たたず)めば、容易になやみの索は断ち切れて、みずからの欲するままに、慰安の光がかがやくかのごとく思う。

しかしながら、信仰は(一)ひとつ(の)奇蹟ではない。

宗教はまた気やすめのための、力なき慰めでもない。

信仰は荷(か)せられた悩みを逃避するのではなく、悩みの肯定のうちに、救いの光にみちびかれるのである。

多くの人たちは、宗教の本質について、かなしき錯覚のもとに、法をもとめようとしている。

そして一様に、みずからの想像する驚異の世界を発見することが出来ずして、却(かえ)つておしえの常凡なるに失望している。

(九条武子)

九条武子 『くじょう・たけこ』

教育者、京都女子学園・京都女子大学設立者、歌人、社会運動活動家、仏教婦人会創設者、1887～1928)

自著 『無憂華』 背くもの』

前号で、お念仏して往生する心映え

の三つの側面(三心)について、愚見を皆様にお話ししましたが、今回は、法然上人がどのようにおっしゃっているか、ご文章を載せます。ご参考にして下さい。

『元祖大師法語』(前編、後編)という書物の中にある文章です。寺院僧侶が、日常のお勤めの時に、作られた冊子(私ももっています)です。

一日に一章ずつ一ヶ月単位で全部読めるように前編・後編それぞれに三十一章のご法語が集められています。

原文については、どなたかが電子化して、読み方をつけて、ブログにお載せになりましたので、そのファイルを使わせて頂きました。アドレスは、<http://ameblo.jp/honen800/>です。

又、編集の途中で、同じ文章に「現代語訳」と



大阪 四天王寺 極楽門と灯籠

註」を付したホームページも見つけました。ただし、ご作業の途中であらわれるらしく、全編に現代語訳が付くのは未だ先のようなです。安心」と「深心」の編だけ「現代語訳と註」を載せました(青字の部分)。そのブログのアドレスは <http://www.d7.dion.ne.jp/~choumei/001/honen-shouni.n.htm> です。見ることが出来る方は、どうぞ。

法然上人の言葉

一、『元祖大師法語』前篇第9章 安心 あんじん

念佛(ねんぶつ)の行者(ぎょうじや)の存(ぞん)じ候(せうろ)うべき様(まう)は、後世(ごせ)をおそれ、往生(おうじょう)をねがいて念佛(ねんぶつ)すれば、おわる時(とき)かならず来迎(らいこう)せさせ給(たま)うよしを存(ぞん)じて、念佛(ねんぶつ)申(もう)すより外(ほか)の事(こと)候(せうら)わず。三心(さんじん)と申(もう)し候(せうら)うも、かさねて申(もう)す時(とき)は、ただ一(ひと)つの願心(がんしん)にて候(せうら)うなり。そのねがう心(こころ)のいつわらず、かざらぬ方(かた)をば、至誠心(じじょうしん)と申(もう)し候(せうら)う。此(こ)の心(こころ)の実(まこと)にて、念佛(ねんぶつ)すれば臨終(りんじゅう)に來迎(らいこう)すという事(こと)を、一念(いちねん)もうたがわぬ方(かた)を、深心(じんしん)とは申(もう)し候(せうら)う。このうえわが身(み)もかの土(ど)へうまれんとおもい、行業(ぎょうごう)をも往生(おうじょう)のためとむくるを、廻向心(えこうしん)とは申(もう)し候(せうら)うなり。此(こ)の故(ゆえ)に、ねがう心(こころ)いつわらずして、げに往生(おうじょう)せんと思(おも)い候(せうら)えば、おのずから三心(さんじん)は具足(ぐそく)する事(こと)にて候(せうら)うなり。

〔以上の現代語訳〕

◎前篇第9章 安心

安心(あんじん)について

念仏の行者が心得ているべきことは来世に悪

道におちることを恐れて極楽往生を願ひ、念仏を唱えれば命終わる時に仏が来迎し給うことを信じ、念仏を唱えることとの外には何もないのである。

念仏を唱える時に具える三心ということを一言でいえば、往生したいと願う心一つになる。

往生を願う心に偽りがなく人目を飾る心のないことを至誠心というのである。

誠の心で往生を願って念仏を唱えれば、臨終に仏が来迎し給うことを疑わずに信ずる心を深心というのである。

その上でわが身も極楽浄土に往生したいと願ひ、すべての善根功德を往生のために振り向けることを廻向発願心というのである。

従って往生を願う心に偽りがなく、本来に往生したいと願って念仏を唱えれば、自然に三心が具足される。

〔以上の註〕

ぎょうじや(ギヤウ・シ) 【行者】

仏道を修行する人。念仏の人を念仏行者、真言を行ずる人を真言行者などという。修行者。

ごせ 後世

生まれかわった後の世。後生(ごしやう)。来世。死後の世界で幸福に暮らすこと。後世の安楽。

らいこう 来迎

念仏行者の臨終に、阿弥陀仏が聖衆とともに迎えに来て浄土に連れて行くこと。御来迎。

さんじん 三心

極楽往生を得るのに必要とされる三種の心で、『観無量寿経』に説く真に浄土を願う至誠心、

念仏によつて往生を得ると深く信ずる深心、念仏の功德をすべて回向して、往生したいと願う回向発願心。

しじょうしん(シジャウ・シ) 【至誠心】

三心の一つ。仏を信ずる、汚れない真心。特に阿弥陀仏を信じ極楽往生を願う真心。

りんじゅう 臨終

死に臨むこと。死にぎわ。いまわのきわ。末期(まづご)。また、死ぬこと。

じんしん 深心

三心の一つ。阿弥陀仏の本願の救いを深く信じて疑わない心。

えこうほつがん(エカウホツガン) 【回向発願】

自分の修めた功德を自他の悟りの資とすることを願うこと。

ぐそく 具足

↑する) 物事が十分に備わっていること。揃い整っていること。

二、『元祖大師法語』後編第9章 至誠心

(至誠心(じじょうしん))

について

〔原文〕

至誠心(じじょうしん)というは、大師(だいし)だしいし(善導大師のこと)釈(しゃく)して宣(のたま)わく、

至(じ)というは真(ま)也(なり)。誠

むよう) というのは実(まこと) 心(こころ) 也(なり) とい
えり。

ただ真実心(まことしん) を至誠心(しじ
ょうしん) と善導(ぜんどう) はおおせられた
る也(なり)。真実(まこと) という心(こころ) は、も
ろもろの虚仮(ごけ) の心(こころ) のなきを
いう也(なり)。

虚仮(ごけ) という心(こころ) は、貪瞋(せんじん) 等
せう) の煩惱(ぼんのう) をおこして正念(し
ょうねん) をうしなうを、虚仮心(ごけしん)
と釈(しゃく) する也(なり)。

すべてもろもろの煩惱(ぼんのう) のおこる事(こと) は、
みなもと貪瞋(せんじん) を母(はは) として
出生(しゅつしょう) するなり。

貪(せん) という心(こころ) について喜足(きそく) 小
欲(じょうよく) の貪(せん) あり、不喜足(ふ
きそく) 大欲(だいよく) の貪(せん) あり。

いま浄土宗(じょうどしゅう) に制(せい)
するところは、不喜足(ふきそく) 大欲(だい
よく) の貪(せん) 煩惱(ぼんのう) 也(なり)。
まず行者(ぎょうじゃ) 、かよりの道理(だうり)
を心(こころ) えて念佛(ねんぶつ) すべ
き也(なり)。これが真実(まこと) の念
佛(にふつ) にてある也(なり)。

喜足(きそく) 小欲(じょうよく) の貪(せん)
はくるしからず。

瞋(じん) 煩惱(ぼんのう) も、敬上(ぎょう
じょう) 慈下(じげ) の心(こころ) をやぶ
らずして道理(だうり) を心(こころ) えんほ
ど也(なり)。

痴(ち) 煩惱(ぼんのう) という心(こころ) は、おろか
なる心(こころ) なり。此(こ) の心(こころ)
をかしくなすべき也(なり)。

まず生死(じょうじ) をいと、浄土(じょうど)

うど) をねがいて、往生(おうじょう) を大事
だいじ) といとなみて、もろもろの家業(か
ぎょう) を事(こと) とせざれば、痴(ち) 煩
悩(ぼんのう) なき也(なり)。

少々(しょうしょう) の痴(ち) は、往生(おう
じょう) のさわりにはならず。

これほどに心(こころ) えつれば、貪瞋(せん
じん) 等(とう) の虚仮(ごけ) の心(こ
ろ) はうせて、真実心(まことしん) は、や
すくおこる也(なり)。

これを浄土(じょうど) の菩提心(ぼだいし
ん) というなり。

詮(せん) ずるところ、生死(じょうじ) の
報(ほう) をかろしめ、念佛(ねんぶつ) の一
行(いちぎょう) をはげむがゆえに、真実心(ま
ことしん) とはいう也(なり)。

三、元祖大師法語(げんそだいたいほふ) 前編(ぜんぺん) 第十一章(じゅういちしょう) 深心(しんしん) につ いて

「原文」
ただ心(こころ) の善悪(ぜんあく) をもか
えりみず、罪(つみ) のかろきおもきをも沙汰
さた) せず、心(こころ) に往生(おうじよ
う) せんとおもいて、口(くち) に南無阿彌陀
佛(なむあみだぶつ) ととなえては、声(こえ)
につきて決定(けつじょう) 往生(おうじょう)
の思(おもい) をなすべし。

その決定心(けつじょうしん) によりて、す
なわち往生(おうじょう) の業(ごう) はさだ
まるなり。

かく心(こころ) えねば、往生(おうじょう)
は不定(ふじょう) なり。往生(おうじょう)
は、不定(ふじょう) とおもえばやがて不定(ふ
じょう) なり。一定(いちじょう) と思(おも)

えば一定(いちじょう) する事(こと) にて候
せうろ) うなり。

されば詮(せん) は、ふかく信(しん) ずる
心(こころ) と申(もう) し候(せうろ) うは、
南無阿彌陀佛(なむあみだぶつ) と申(もう)
せば、その佛(ほとけ) の誓(ちかひ) にて、
いかなる身(み) をもきらわず、一定(いちじ
ょう) むかえ給(たま) うぞと、ふかくたのみ
て、いかなるとがをもかえりみず、うたがう心
こころ) の、すこしもなきを申(もう) し候
せうろ) うなり。

「以上の現代語訳」

専ら、心の煩惱や、罪の軽い思いを氣にかけ
ずに往生したいと願い南無阿彌陀佛と唱えれば、
念仏の声によつて必ず往生できることを知らな
ければなりません。

必ず往生できると信じる心によつて、往生の果
報が決まります。

この心得のない者は往生できると決まっていま
せん。往生を不確かであると思つている者は、
結局往生も不確かになります。

必ず往生できると信じてこそ、必ず往生できる
ものです。

要するに深く信ずる心というのは南無阿彌陀佛
と唱えらば仏の本願に乗じ、どのような凡夫で
も差別することなく必ず来迎し給うことを深く
頼み、どのような罪も氣にかけずに深く信じ、
少しも疑う心のないことです。

「以上の註」

けつじょう - おうじょう(ケツヂヤウワウジヤ
ウ) 【決定往生】

必ず極楽に往生すること。また、極楽に往生
すると決まっていること。

ぼんのう(・ナウ) 煩惱【】

心を煩わし、身を悩ます心の働き。心身を悩ます一切の精神作用の総称。貪・瞋・痴の三つは三毒と称して、その最も根元的なものとする

かほう(クワ・シ) 果報【】

前世での善悪さまさまの所為が原因となって、現世でその結果として受ける種々の報い。

なむあみだぶつ 南無阿弥陀仏【】

阿弥陀仏に皈依することを表すことば。浄土の信仰者は等しくこれを称えて極楽浄土を願う。六字名号

四、元祖大師法語』後編第十一章 廻向発願心

廻向発願心 念こうほうつ
がんじん) について

「原文」

廻向 念こう) 発願心 ほつがんじん) というは、過去 かこ) および今生 わじょう) の、身口意 じんくい) 業 ぎょう) に修 じゆ) するところの、一切 ひつさい) の善根 ぜんごん) を、真実 じんじつ) の心 こころ) をもて極楽 ぎくらく) に廻向 念こう) して、往生 おうじょう) を欣求 こんぐ) する也 なり。

これを廻向 念こう) 発願心 ほつがんじん) となづく。

この三心 さんじん) を具 ぐ) しぬれば、かならず往生 おうじょう) する也 なり。

以上四つの章の出典は、『元祖大師法語』前編、後編です。

時間の関係で、今回は、4つの言葉の内、2つにしか現代語訳を付せられませんでした。原文だけの法語も、よくお読みになれば、意味はお解りになると思います。

今回お示しました四つのご法語は、『元祖大師法語』の中の

- 一、前編 第9章 安心
- 二、後編 第9章 至誠心
- 三、前編 第十一章 深心
- 四、後編 第十二章 廻向発願心

です。次回に少しご説明を致したいと思っておりますが、何よりも大事なことは、念仏を唱える時に具える三心ということを一言でいえば、**往生したいと願う心**という事だけでありまして、その一つの願う気持ちを三つの面から説明すると、

一、いつわりのない方面から説明すると、二、後編 第9章 至誠心」の言葉になり、二、うたがいのない方面から説明すると、三、前編 第十一章 深心」の言葉になり、三、極楽に往生するという人生の目標を持っているという方面から説明すると、四、後編 第十一章 廻向発願心」の言葉になる、と受け取らせて頂く、という事です。人目をかざりたくなる人は、『二、後編 第9章 至誠心」の言葉を参考にし、この身のつたなさをかえりみるあまり、お念仏申すことで必ず往生出来るとみ仏のお力を疑わ

ない事に自信がない人は、『三、前編 第十一章 深心」の言葉を参考にし、人生終わる時まで極楽をあこがれて往生を目指す事がどうもあやふやになるかも知れないと思われる人は、『四、後編 第十一章 廻向発願心」の文章を参考に努力すればよい、と考えればいいのです。

表題欄写真の解説

大阪 四天王寺 極楽門と灯籠」

聖徳太子が、日本で最初にお建てになった、国立の寺院です。(「官寺」といいます。)

(四天王とは、仏教を守護する四人の神様です。多聞天(毘沙門天)、「持國天」、「增長天」、「広目天」

というお名前です。極楽門」とは、浄土宗の開祖法然上人が四天王寺の「東門」といわれている門で、極楽への方向を指し示している、と言われています。

紅葉

